

『動学マクロ経済学へのいざない』

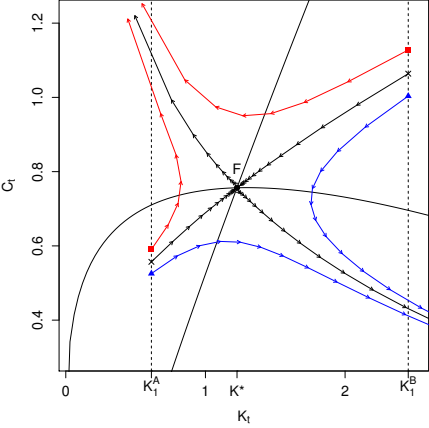
正誤表

蓮見 亮

2024 年 10 月 7 日

初版第 1 刷正誤表

箇所	(誤)	(正)
p.10 脚注 7	(差替)	(1.9) 式の両辺から k^* を引くと $k_{t+1} - k^* = \frac{1 - \delta}{(1 + g)(1 + n)}(k_t - k^*) + \frac{sk_t^\alpha - (g + n + \delta)k^*}{(1 + g)(1 + n)}$ となるが, $k_t > k^*$ の場合, $sk_t^\alpha > s(k^*)^\alpha = (g + n + \delta)k^*$, $sk_t^\alpha < (g + n + \delta)k_t$ より $0 < \frac{1 - \delta}{(1 + g)(1 + n)}(k_t - k^*) < k_{t+1} - k^* < k_t - k^*$ である. したがって k_t は下に有界かつ単調減少なので k^* に収束する. $k_t < k^*$ の場合も同様に示せる.
p.37 7 行目	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\mathbf{x}^*) = 0$	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\mathbf{x}^*, \lambda) = 0$
p.37 下から 4 行目	$\min_{\mathbf{x}}$	$\max_{\mathbf{x}}$
p.38 3 行目	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\mathbf{x}^*) = 0$	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\mathbf{x}^*, \lambda) = 0$

p.46 脚注 12	(少しの差ではあるが)	(削除)
同	(加筆)	また, (2.48) 式の左辺を 0 とおいて K について解くことにより, K の上限 $K_{\max} = \left(\frac{\delta}{A_t}\right)^{\frac{1}{\alpha-1}}$ が得られる.
p.50 図 2.9	(差替)	
p.50	(脚注追加)	<p>図 2.6 の $\Delta C_t = 0$ は, (2.46) 式の K_{t+1} に (2.43) 式の右辺を代入して $C_t (= C)$ について解くと</p> $C = AK_t^\alpha + (1 - \delta)K_t - K^*$ <p>なので, 厳密には右上がりの曲線である.</p>
p.50 下から 4 行目	$K_t \rightarrow \infty$ ($t \rightarrow \infty$) となるが,	$K_t \rightarrow K_{\max}$ ($t \rightarrow \infty$) となるが (脚注 12 参照),
p.71 2 行目	と (4.27) 式	(削除)
p.122 (6.41) 式	, $\alpha \in \mathbb{R}$	(削除)
p.138 (6.98) 式	$\ln(C_t) + \mu L^{\gamma+1}$	$\ln(C_t) - \mu L^{\gamma+1}$
p.148 3 行目	$\max_{\pi, \hat{x}}$	$\max_{\hat{i}, \pi, \hat{x}}$
p.150 10 行目	粘着的	粘着性

p.158 (7.52) 式 1 行目	$\sum_{i=0}^{\infty} \eta \left(\frac{\varrho}{1-\varrho} \right) \pi_{t+i}^2$	$\sum_{i=0}^{\infty} \eta \left(\frac{\varrho}{1-\varrho} \right) \beta^i \pi_{t+i}^2$
同式 2 行目	$\left(\frac{\eta \varrho}{1-\varrho} \right) \sum_{i=0}^{\infty} \pi_{t+i}^2$	$\left(\frac{\eta \varrho}{1-\varrho} \right) \sum_{i=0}^{\infty} \beta^i \pi_{t+i}^2$
p.158 (7.53) 式	$\sum_{i=0}^{\infty} \pi_{t+i}^2$	$\sum_{i=0}^{\infty} \beta^i \pi_{t+i}^2$
p.168 下から 5 行目	ボレル集合族 \mathcal{B}	\mathbb{R} 上のボレル集合族 \mathcal{B}
p.190 下から 2 行目	ただし、次節の例では R は θ に依存しない。	(削除)
p.192 (8.72) 式	, $R = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \end{bmatrix}$	(削除)
p.190 下から 3 行目	求まらないので,	求まらない 場合がある ので,
p.192 下から 2 行目	Blanchard and Kahn の方法	Sims の方法
p.193 (8.73) 式	R	$R(\theta)$
p.199	[2] に追記	(邦訳：和合肇・松田安昌 訳『状態空間モデリングによる時系列分析入門』シーエーピー出版, 2004)
同	[11] に追記	(邦訳：赤堀次郎・原啓介・山田俊雄 訳『マルチンゲールによる確率論』培風館, 2004)

初版第 2 刷正誤表

p.10 脚注 7	(差替)	<p>(1.9) 式の両辺から k^* を引くと</p> $k_{t+1} - k^* = \frac{1 - \delta}{(1 + g)(1 + n)}(k_t - k^*) + \frac{sk_t^\alpha - (g + n + \delta)k^*}{(1 + g)(1 + n)}$ <p>となるが, $k_t > k^*$ の場合, $sk_t^\alpha > s(k^*)^\alpha = (g + n + \delta)k^*$, $sk_t^\alpha < (g + n + \delta)k_t$ より</p> $0 < \frac{1 - \delta}{(1 + g)(1 + n)}(k_t - k^*) < k_{t+1} - k^* < k_t - k^*$ <p>である. したがって k_t は下に有界かつ単調減少なので k^* に収束する. $k_t < k^*$ の場合も同様に示せる.</p>
p.37 7 行目	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\mathbf{x}^*) = 0$	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\mathbf{x}^*, \lambda) = 0$
p.37 下から 4 行目	$\min_{\mathbf{x}}$	$\max_{\mathbf{x}}$
p.38 3 行目	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\mathbf{x}^*) = 0$	$\frac{\partial L}{\partial x_i}(\mathbf{x}^*, \lambda) = 0$
p.122 (6.41) 式	, $\alpha \in \mathbb{R}$	(削除)
p.148 3 行目	$\max_{\pi, \hat{x}}$	$\max_{i, \pi, \hat{x}}$
p.150 10 行目	粘着的	粘着性
p.190 下から 3 行目	求まらないので,	求まらない場合があるので,
p.190 下から 2 行目	ただし, 次節の例では R は θ に依存しない.	(削除)

p.192 (8.72) 式	, $R = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \end{bmatrix}$	(削除)
p.192 下から 2 行目	Blanchard and Kahn の方法	Sims の方法
p.193 (8.73) 式	R	$R(\theta)$
p.199	[2] に追記	(邦訳：和合肇・松田安昌 訳『状態空間モデリングによる時系列分析入門』シーエーピー出版, 2004)
同	[11] に追記	(邦訳：赤堀次郎・原啓介・山田俊雄 訳『マルチンゲールによる確率論』培風館, 2004)